



人は水とともに

生きていく

気象工学研究所

気象予報士

吉村 真希
よしむら まき

京都の夏は厳しい暑さだが、貴船の川床では清流に手が届きそうな距離で涼しい風を感じながら京料理が楽しめる。

奈良はそうめん発祥の地とされており、三輪山の山中から湧き出る水と冬の寒風が上質なそうめんを作っている。

私は食えることが大好きで大地の恵みが生きる活力だ。郷土料理を味わうことで、各地の天気を肌で感じることができ、日々の天気予報の仕事



気象キャスター仲間との日吉ダム見学
中央 吉村気象予報士

にも役立つている。と、思っている。

朝起きて顔を洗う水の温度で季節の歩みを感じ、ポトスの新芽の愛らしさに水やりをしながら自然と笑顔がこぼれる。最近始めたアクアウォーキングでは水の中で軽くなった身体を自由自在に動かし、一日の終わりに香りを楽しみながら淹れるコーヒーは至福の時間である。

そんな日常のある朝に、大地を揺らす大地震が起こった。

今年六月、大阪で震度六弱の地震が起こった。大阪では一九二三年以降初めての大きな地震だ。下から突き上げるような大きな揺れで咄嗟に何もできなかった。揺れが収まり情報を確認して家を出た。電車は運行しておらず、梅雨時の蒸し暑さの中を一時間以上歩いて汗だくになりながら、ようやく職場のテレビ局にたどり着く。ほっとして自席で飲んだ冷たい水が、心身を潤してくれた。

さらに七月には、平成に入って最悪の大雨被害を引き起こした「平成三十年七月豪雨」が発生。普段は穏やかな川の流れば、土砂や流木を含む茶色い濁流となる。川にかかる橋の所で土砂がせき止められると、新たな流れを探すように住宅街をのみこんでゆく。過去に経験したことのないような被害が起こるようになった。災害は新たなステージに入っているのだ。



貴船の川床

地震や、豪雨災害の前後という非常事態こそ気象予報士の役割は大きい。危険な場所には近づかないように、暗くなる前に早めに避難するなど安全確保の行動を起こしてもらいたい一心で呼びかける。レーダーで発達した雨雲を監視しながら、これまでに降った雨量とこれから予想される雨量を必死に伝える。刻々と明らかになる被害の前に、無力な自分を感じながら。

それからは何気ない日常に感謝の日々が続く。水は私たちに恵みを与えてくれると同時に私たちの驕りや行き過ぎを正すためなのか大雨となつて猛威を振るう。

雨は地球の涙、雷は悲鳴のように感じる時がある。

天災は忘れた頃にやってくる。天災を学びとして、今自分にできることは何なのかを考えていきたい。